せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第147号・平成13年12月1日

年表で読む古平の歴史

《53》

■道路の建設で褒賞

安政四年（一八五七）、箱館奉行の堀織部正が後志地方を視察したときに、小樽と古平の土地開拓や道路の建設、アイヌ人の保護などが行き届いているとして、褒状のほかにも下賜品があったといいます。また、このことを幕府に上申し、幕府からもそれぞれ十二か所の場所請負人に褒賞がありました。

古平は岡田家（屋号は恵比須屋）が請負人でしたが、銀七枚を下賜されました。

■駅逓と馬の飼育

道路が次第に整ってきたことから、幕府の役人などの往来も増えてきました。西蝦夷地では場所請負人が駅逓（宿泊所・人や荷物、手紙などを運ぶ馬継ぎ所）のこと一切を取り扱うようになり、古平の運上屋では建物が狭くなり改築しました。

また蝦夷地で、物資の運搬にはアイヌの人たちが使われていましたが、交通がひんぱんになるにつれて労働も過重になってきたことから、箱館奉行は早くから自由に馬の飼育を許していました。そして運搬継立てを出願する者は許可し、その後、西蝦夷地の各場所にも貸付けをしていました。

■各地への里程（距離）

安政三年（一八五六）の記録から、古平周辺の交通路の里程を見てみましょう。

▽夏　村（シャコタン）
ヒクニへ海上五里十六丁（二一・四キロ）、運上屋一軒、人家二軒ばかり、漁小屋七十軒ばかり、船澗よろし。

▽肥　国（ヒクニ）
フルヒラへ一里二十一丁（六二・二四キロ）、運上屋一軒、人家六、七軒、漁小屋四十軒ばかり

▽古　平
ヨイチへ海上四里二四丁（一八・四キロ）、運上屋一軒、人家五十軒余り、漁小屋百軒余り、船澗あり。

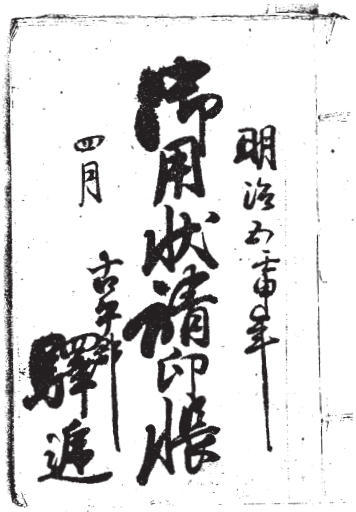
▽余　市
ヲショロへ海陸二里九丁（八・八五キロ）、運上屋一軒、人家八十五軒程あり、船澗よろし。

■宿泊料・継立て料金

安政の初めころの宿泊料は、幕府の役人であればその持ち場内では三食付きで五五文、持ち場以外では七五文でしたが、諸藩の藩士らは一五〇文で、すべて一汁一菜と定められていました。（当時の一文は、現在の貨幣価値と比べてどのぐらいなのかは分かりませんが、幕府の役人は大変優遇されていたわけです）

人馬の賃金は、一里に付き人夫一人二〇文、馬一頭四〇文でしたが、幕府の役人は持ち場内であれば半額でした。荷物の場合はそれぞれ重さが制限されていて、人夫は五貫（約一八・八キロ）、馬は二〇貫（七五〇キロ）と定められていました。

明治二年、場所請負人が廃止になると、この駅逓は本陣で行われましたが、全道の駅逓の数は一一一か所、後志管内では島古丹・岩内・余市・塩谷・小樽・銭函で、このほか支線として泊・古平・積丹・古宇・の四か所がありました。



明治五壬申年
御用状請印帳　古平郡駅逓

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【48】

＜大正九年＞

1／17　このごろは実に閑散である、網類の客も無くどうしたものか不思議だ、札幌、そのほか本州でも流行性感冒で死者がおびただしい、恐ろしいことだ、警戒を要する。

1／30　快晴、カレ網はみんな出たが、値段が安いというので一向に元気がない、そのせいもあり店も閑散だ、去年あたりだともう刺網の客が大分あった、かぜ気味である。

2／1　快晴、裏の日当たりの良いところは土が出ている、今日までまだ一回も屋根の雪下ろしをしていない、こんな雪不足なことは何十年来の珍しいことだという、流行性感冒での死亡者がずい分とあるようだ、学校でもマスクにうがいをするようにと言っている。（なぜか2／3から、四十日ほど日記が途切れている）

3／12　五時半に起きて、運動がてらに農園まで行ってみる、漁期が近づいて来たので、漁夫が忙しそうに歩いている、雪が固いので歩いても苦にならない、店も刺網、建網から注文がある、古英丸、共栄丸が入港したので網類が入荷した。

3／14　朝早く△仲谷のトンネル辺りまで行って見る、船の準備や鰊がまのかまどを造っているところだ、網を持ち出したりしてそれぞれ準備に忙しいようだ、美国で不幸があり、葬式に行って来たが道路がざくざく道で疲れた、帰り港町越中屋で休み、だんごをご馳走になる。

3／15　漁期に入り店も相当に忙しくなってきた、呉服屋さんは今日は休業日で、本では蓄音機をかけて賑やかだ、物産商組合も月一回の休みをとることにし、三月二十一日（日曜日）がその第一回目の休みの日になる、ボイル油の客が二十数人も三斗余り売る。

3／17　昨日の風はずい分ひどかった、海もまだ大時化だ、ある漁場では、漁夫がかぜで二十人から休んでいるという、困ったものだ。

3／18　六時に起床し早々に浜へ出て見る、網下ろしをするところが沢山あり賑やかだ、昨夜、㋕が一か統だけが投網し、初起しで初鰊が獲れたというので三尾貫う、本年の初物である、魚体はまだ小さいようだが、とにかく初物はありがたいことである。

3／19　昨夜は㋕一か統だけであったが、二十本以上もとれたというので浜は大騒ぎ、町中がにわかに活気づいてきた、建網も刺網も今日はほとんどが準備できたようだ、余市では昨夜、千五百石とれたとのこと、店もロープの類が多く出る。

3／20　町は暗いうちからガヤガヤと人の声がし、昨夜の様子はどうかと浜へゾロゾロと行く、沢江〇十五～六杯、ほかは二～三杯、刺網はモッコ一～二杯だ、合計二百石ぐらいか、美国方面は厚苫辺りが大漁、熊木、野村は二十杯以上、松田、共同も二十杯ぐらいだ、本十八杯、恵比須神社で中町部落会協議会があり行く。

3／21　鰊漁はない、岩内、寿都方面の鰊便りは全く無い、今日は物産商組合連合休業日の第一回目だ。

3／23　昨夜は時化模様だったが投網したところがある、崎長や△、八反田などでは一枠、八は十七杯とったという、〇では汲船が水船になり鰊を流したという、浜には沢山の人が鰊拾いに出ている、家でももっこを持って浜へ行ったがずい分寄っている、二時間ほどで四もっこも拾った、

3／26　寒さが厳しく雪がチラチラ降っている、未明から人の声がするので起きてみたら、鰊大漁とのこと、泥の木歩方から歌棄山中までが大漁で、△三枠、崎長二枠、〈キ二枠、〇、中、各一枠、丸山岬で種金二十杯、㋝二十杯、群来村は無し、刺網は浜中、沢江方面大漁、この日合計七千石、今までで合計一万石はとれたろう、第一等の成績だ。（以下次号）

断章小説【ふるさと遥か】第29編

同級生

吉川義雄

クラス会をやったのは、一体何年前だったろうか・・・と、友野はときどき考える。

古平在住の友から連絡を受け、大喜びで札幌から新家寿しの二階に馳せ参じたことを覚えている。

地方から参加したのは、男は友野、女性は久本さんだけだったが、町内からの友を合わせると、総勢二十人程も集まったことを思い出す。女性は名字が代わり、容姿も変わっていて、自己紹介してもらわないうちはほとんど分からなかった。

男たちは、戦死した友の名を次々と列挙して悲しんだ。何のことはない、病死も含めて七割近くも亡くなっていた。

廊下を挟んで、大きな部屋の方から盛んな歓声が上がる。友野たちのクラスからはるかに遠い、戦後の郷党たちが同じくクラス会をやっているようだが、彼等には何の屈託もない。

友野が札幌に帰り、ふるさとの温もりを味わっているうちに、当時出席していた五人程の男性のうち、阿辺君と続いて松尾君が病死したと、山根君から次々と報せを受けた。何ということだ。あれ程元気で旧交を温め合ったのに・・・。友野は数日の間、暗澹とした気分を持て余していた。

当時、友野も、その仲間たちも六十歳代だったはずだから、以来、早くも二十年近い歳月が流れている。クラス会の幹事をしてくれた山根君からは、変わらずに年賀状が友野の許に届き、それだけが、確たるふるさとの便りとなって友野に友情を届ける。

新地分教場で四年を終えた生徒は、五年生と同時に、本校と呼ばれた大きな浜町の校舎に移される。は組以外は男女別々の教室となり、共学に慣れた分教場出身には戸惑いもあった。

友野は今までどおりの共学のは組に編入され、内心安堵したし、見知らぬ美しい女性たちが、浜町の知的なムードを教室に漂わせるのを、畏敬の目で遠くから見た。

大正生まれ同士の男女に、小学生といえども親しく言葉を交わすなぞの、大らかな空気は無かった時代、クラスの中ですべてに目を引く山川美江さんは、美しさに加え抜群の成績で、友野は遠くから只々尊敬の眼を向ける二年間であった。

美江さんは、六年を終えると札幌の女学校に去り、友野はその後二年の高等科を終えてから札幌の書店奉公に出た。

書店の店先に立つ彼の目の前を、まぎれもない女学生姿の美江さんが友だちと通り過ぎて行くのを見た。

その翌年、札幌在住の柴山君が、札幌で同窓会をやろうと、彼のところに何度も足繁くやって来た。いつの間にか、街の中心にいる彼が事務局的な存在になっていた。

山川美江さんが、彼を訪ねて来るのに時間はかからなかった。彼女はもう市役所に勤めていた。市内で同窓会を開く日まで、彼等は何度も合い打ち合わせをした。急速に親交が深まっていった。何でも話し合えた。

戦争が次第に激化するころ、彼女の口から、結婚話が持ち込まれていることの悩みを打ち明けられた。友野自身も、出征の近い不安定な日々でもあった。

戦後、友野と彼女はふるさと古平で、再会の喜びを一度だけ語り合った。彼女の再婚先、千葉県から友野のところに何度か便りがあり、それがふっと途絶えたとき、彼女が亡くなったことを知った。

（この稿　終わり）

―古平いろはうた―

つ　ツルノッペ草に埋もれたイチゴ畑

ツルノッペというのは、歌棄町から沖町への途中に立岩があり、国道を挟んで山側に急な小さな沢がありますが、この辺りの地名です。沖村街道と言ってたころの通称・三番目のトンネルを過ぎた辺りになります。

ツルノッペというのは「鳥卵岩」とも解釈されていますが、これではよく分かりません。古い記録にはツルノフ・チリンポなどとありますが、古平の人はツリンボなどとも呼んでいたようです。

この地名は、明治34年から大正時代までの5分の1地形図にはありますが、現在の地図には載っていません。

国道から沢伝えに2、300メートル上ると、やや平坦な丘陵地帯があり、この辺りに昭和30年代まで、浜町の斉藤さんがイチゴを栽培していました。ここに小屋を建てて、収穫時期には一家がここへ移って来て生活していました。付近には沢水もあり、燃料のたき木もあって夏の間の生活には事欠かなかったようです。

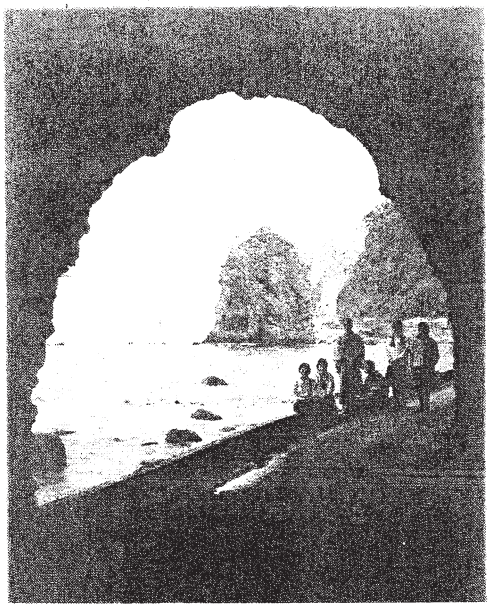
斉藤さん一家が古平から移住後のイチゴ畑は管理する人もなく、そのまま草に埋もれてしまいましたが、何かでここを訪ねた人が、ところどころにイチゴのなっているのを見ることがあったそうです。

明治41年、沖村街道に3番目のトンネルが出来るまでは、この辺りに歌棄～沖村間の道路があり、ここの沢には橋が掛かっていました。

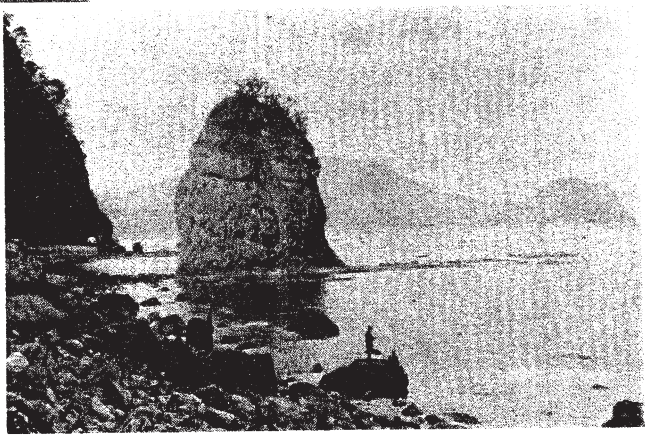
また、ここからさらに頂上付近まで近づくとなだらかな地形が広がり、ここは明治20年代に、沖村の米田さんが道から土地の払い下げを受け牧場を開いたところです。詳しい資料はありませんが、一時期、牛乳などを生産・販売していました。大正時代の地図には米田牧場が載っています。

歌棄町の共働の家を過ぎて、頂上の広大な平坦部に古平牧場がありますが、この辺が昔の米田牧場の跡ではないかと思われます。ここから西の方角を眺めると、意外と近く積丹岳・余別岳が並んで見え、そのすぐ手前に当丸山・両古美山・泥の木山や、同じような高さの無名の山々が一線に並んで見えます。

ツルノップから登り切った山頂付近からは、また変わった古平の風景が楽しめるようです。



旧沖村街道の三番目のトンネルから見たツルノップ付近



ツルノッペ付近の海岸風景

願いごと鬼子母神の正隆寺

鬼子母神（きしもじん）は、ご利益のある神様として信心する人が多く、正隆寺では11月8日を鬼子母神大祭の日として、大勢の信徒が参詣に訪れています。

鬼子母神という日本語は、その元の名前［ハーリティ］の意味から訳した言葉で、随分こわそうな名前ですが実は女の神様です。この女が生まれたとき、多くの夜叉（薬叉＝やしゃ）は喜んで＜歓喜＞という意味の名前を付けたそうですが、なんと彼女は多くの子女を取っては食う恐ろしい女でしたので、民衆は「これは歓喜ではなく［ハーリティ＝夜叉女だ］」と、叫んだといいます。

やがて母となりましたが性格が凶暴で、人の子を殺しては食うので人々はこれを嘆いて仏陀（ぶつだ）に訴えました。考えるところがあって仏陀は末の子どもを隠したところ、鬼子母は必死で探したが見つけることができず、仏陀のところへ行って自分の子の所在を聞きました。

そこで仏陀は、彼女の非をさとし仏法に帰依させた後に子を返した、ということが一般的に知られている話です。

それからは法華教を守る神に変身し、日蓮宗ではこの女神をご祈祷の本尊として崇拝するようになり、江戸時代から鬼子母神信仰が盛んになったといわれています。

インドでは古くからこの神様を安産の神として祀り、日本でもその風習から出産・育児の神様として祀る習慣がありました。

鬼子母神の形像は、元来はいすに腰を掛け、左手に一人の子どもを抱き、五人の子どもがこれを取り囲んでいるという姿でした。現在、日蓮宗のお寺にあるのは多くは立像で鬼の形相をし、長髪、合掌をしています

よく知られている鬼子母神像

が、これらは鬼子母神という文字からうける印象と、ご祈祷をするという行いからくるものだろうといわれています。

正隆寺に祀られている鬼子母神は、東京浦安に在住していた著名な浅子仏師（あさこしゅうけい）が昭和7年に制作したものです。形像の制作に当たってはまず数十センチの原型を彫り、それを自分のイメージに合うように修正してから本体の制作にかかるそうです。そのときの原型になった像は、積丹・来岸町の来岸寺に納められましたが、現在そのお寺はありませんので、外のお寺に祀られているのだろうとのことです。

この鬼子母神像は一本の大木から彫刻したもので、像の高さは六尺（1・8メートル）、台座共約1丈（約3メートル）で、浅子仏師による等身大の鬼子母神は国内に3体しかありません。

また、それまで祀られていた30センチ程の鬼子母神像は、現在の像の体内に埋め込まれていますが、この像も浅子仏師の作といわれています。

正隆寺の鬼子母神像は、黒々とした長髪を腰のあたりまで垂らし、大変柔和な顔で合掌をしておられます。

鬼子母神の写真を載せたかったのですが、「鬼子母神様の写真を撮った人には、どうもその後難儀がふりかかるようだ。」という住職さんの一言で、残念ながら写真撮影は断念しましたが、関心のある方はぜひ正隆寺へお参りし拝観してください。

苗木植え

竹内コト

昔は沢江の裏山に登ると、青々とした緑が目の前にいっぱいに広がって、とてもよい気持ちでした。

沢江に生まれたので、小さいころからよく父母について山へ行ったものです。

ある日のこと、父は朝から何やら忙しそうにしていましたが、山へ行く準備をしていたのです。イチゴ畑の跡に、トド松の苗を植えるというのです。

その日は学校も休みでしたので、手伝ってほしいというのです。苗木を分けてそれぞれが背負い、くわなどを持って山へ向かいました。

場所は、前に何回も母と一緒にイチゴ取りに行ったことがあるのでわかっていました。向い側には、ちょうど今の古平牧場が見えるところです。

畑に着くと、父は一服する間もなく用意して来た縄を張り、間隔を見計らって松苗を置いていくのです。その後ろから、私たちはくわを力いっぱい振り下ろして穴をあけ、そこに松苗を植えると根を強く足で踏みつけます。こうして寒さから根を守ってやるのです。作業はいたって簡単ですが、父はていねいに教えてくれました。

苗を植えてから後も、毎年、父は下刈りをするといっては一人で出かけていました。五年、一〇年と経って松が生長するとともに、今度は枝払いに行きますが、生長の様子を見て混んでるところは間引きもします。木を育てるということはこんなにも手間がかかり、大変なことなんだとしみじみ思いました。

今はもう父母も姉も亡くなりましたが、木はすくすくと生長し、しっかり根付いてりっぱな林になっています。

私はもう八〇歳に手が届く年齢ですが、今の浜町の家から沢江の山を眺めては、当時のことを思い出しております。こうした先祖の苦労を、子どもや孫に伝えていきたいものです。

こんなことを書いてみるのも先祖の供養になるかしらネ。

思い出の詠一首

遠き日の思慕よみがえりふもとより眺む松木立の青き山々

× × ×

ぶらり寺の一人旅

室谷忠雄

この寺は、元は豊臣秀吉の側室淀殿が、父浅井長政の追善供養のために建てた寺でしたが、後に、徳川氏の菩提所になったいうおもしろい寺なのです。

一六〇〇年に有名な関ケ原の合戦があり、石田三成方に攻められて伏見城が落城し、城主の鳥居元忠以下大勢の家臣が城の廊下で自刃して果てました。この時の血のりが人間の倒れているような、さまざまな姿形となって残っていたというのです。

戦いが終わって五年後に二代将軍になった秀忠は、間もなくお江という娘を正室に迎えましたが、このお江は浅井長政の娘で淀殿の妹だったのです。

これまで養源院は淀殿の寺として荒廃していましたが、お江の方の力により再建されることになりました。先に、伏見城で自刃した徳川家の家臣を供養するため、伏見城廊下の板を天井板として使ったことから、後に『血天井の養源院』として有名になってしまいました。

この寺は浄土真宗の寺ですが、お江の方が再興してからは徳川家の菩提所として、小さいながら格式のある寺として知られるようになりました。※⇧

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内
蝦夷草紙
を読んでみましょう

〈17〉

嫉妬心の深いこと

寛政元年（一七八九）、クナシリ（国後）島のアイヌ人が反乱を起こして、和人八〇人余りを打ち殺すという事件があり、松前藩ではこれを取り鎮めるために、新井田孫三郎を総大将として派遣し、アイヌ三七人を討ち取り騒ぎを鎮めた。

ことの起こりは、この島の請負人は飛騨屋九兵衛という者で、この場所の総乙名はサンキチという温和なアイヌであった。

ところが、この飛騨屋の支配人佐兵衛という者が、日ごろからサンキチの娘に言い寄っていた。あるときサンキチが大病になり、普段から酒が好物だったので手下の者が運上屋へ行きその訳を話したところ、勘兵衛という番人が酒を飲んでいたが、この酒は一期の名残りだと言いながら渡した。

早速、持ち帰った酒をサンキチに飲ませたところ、ほどなくしてサンキチは死んでしまった。

手下は、以前から佐兵衛とサンキチの娘とのことを知っていたので、さては、娘とのことでとやかく言われるのを嫌って毒酒を与えたのでは、それで一期の名残りなどと言ったのかと、そのことを確かめもせずに言い触らした。

また、あるアイヌの女が、親しくしている運上屋の者から餅を貰って食べたところ、これもほどなくして死んでしまった。運上屋の者がアイヌの女を妊娠させてしまったので、後で問題の起こらないように毒殺したとの噂が広がった。

以前、言い付けにそむく者があったときは毒殺するなどと、運上屋の者がアイヌにおどしをかけたことがあり、このままではこれからどうなることかと一同が協議し、サンキチの敵討ちなどと言い合って徒党を組み、一時は大変なことになった。

蝦夷では、松前藩士の詰めていない所は商人、船方、猟師などが自分たちの利欲にばかり心をよせ、秩序もなく、横暴なる振る舞いが多くまことに嘆かわしいことである。

疫病のこと

アイヌの日本風俗に慣れることは松前藩の禁制であった。そのためアイヌが日本語を使うと過料を取られ、蓑（みの）を着たり、笠をかぶったりすると叱られ、草鞋（わらじ）をはくことも、脚絆（きゃはん）をつけることも全てとがめられた。

それで、岩場や葦原（あしはら）などを通るときもはだしか素足である。頭からぬれても入浴をする習慣がない。そのために、いったん疫病などが流行すると激しく、ほとんど医薬の知識がないのでその伝染を恐れ、疱瘡（ほうそう）や悪疫が流行すると家を捨てて山奥に逃げ去る。親子・夫婦の間だと看病をしても、その他は見捨てて逃げ去る。世人はアイヌに人情がないようなことを言うが、逆で礼儀が正しく、病人を置いて山へ逃げるなどは、医薬の方法がないからであって、不憫（ふびん）。に堪えがたいものがある

※ 実際に天井を見上げると、シミが何となく人の形や血だまりに見えたりして、決して気持ちの良いものではありません。

ちなみに養源院の廊下は、左甚五郎が作ったうぐいす張りの廊下になっています。

豊臣方の姉と、徳川方の妹が時を経て結ばれていることに、数奇な運命と歴史を感じないではいられません。

養源院は、有名な京都・三十三間堂の東大門の道をはさんですぐ向い側にあります。

短歌

古平町岬短歌会

思はぬに遠来し娘と買物せしこの嬉しさに寝に就く今宵　池田テル

南風又吹き立つと耳澄ませば裏の小路へ自動車入りゆく　奥山きよみ

六十余年つゞけし銭湯最後の日無料のにぎはひ遠き日に似て　榊佳代

しまき降る雨に傘などさし掛けたく庭の花は窓より見やる　鈴木時子

満ち潮にとび発つとりは波紋よせ日没の空の彼方へと消ゆ　竹内コト

シャンソンの枯葉思はすあの景色一夜明くれば白一色に　田中香苗

浮雲の夕陽に染まりゆったりとやさしき伯母の逝きしを想う　丹後初江

遠き山くきやかに見え暮れてゆく深まる秋の空夕映えて　堀典子

境内の栗の実拾ふあが心憶良の短歌をそらんじつつも　山口スヱ

俳句

古平ホトトギス会

子育ても遠き日のこと木の葉髪　斉藤波留

段取りのゆき届きたる冬囲い　山口悦子

鈴踊る祭り化粧の漢かな　越野敏雄

大車庫絵画し鱈の跳ねてをり　大和田絵伊

しばらくは河口の遊ぶ鮭の群　福井幸平

早朝のパークゴルフ場霜白く　関口勝志

今朝の雪島の日和のすぐ崩れ　よしざきり

寸晴れの軍手取替え冬始末　仲谷比呂古

山峡の奈落より湧く蟲の声　越野清治

冬雲のかかる岬や今出船　室谷弘子

編集後記

▽先月、写真集《古平のにしん漁》を300部作りましたが、4、5日で品切れの好評でした。来年2月ごろ第2集を予定しております。

▽『せたかむい』も文化祭の人出が多かったせいか早々に品切れ、1月号は12ページで発行します。

▽寄贈いただきましてお礼
岩崎勝博さんより【大正十年・古平郡鰊漁場連絡図】軸装、【古平海域漁場基本図】外1点、ありがとうございます。

♣昔の古平の話題を掘り起こしたり、そんなことに興味のある方、お願いします。